日華　二人の白夜叉と赤夜叉

獅兎羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
日華　二人の白夜叉と赤夜叉

【Ｎコード】
Ｎ４４２９ＢＡ

【作者名】
獅兎羅

【あらすじ】
攘夷戦争の末期。そんな時代、戦場に白き夜叉が率いた部隊があった。鬼の女～血の娘～とはまったく違うストーリー。

第零訓　日華という名の部隊（前書き）

鬼の女～血の娘～の違うストーリーとなっています。

そのため、坂田　龍銀、芦咲　露呑、源　義希の３人は出ます。

今回は鬼兵隊は敵です。

うまく書けるか分かりませんがお願いします。

第零訓　日華という名の部隊

攘夷戦争末期。

戦場にひとつの部隊。

名を『日華』

率いていたのは・・・。

銀色の髪に血を浴び、戦場を駆る白き夜叉。

そんな白き夜叉が率いたその部隊にもう二人の夜叉が・・・。

なびく銀色の髪に血を浴びるもう一人の白き夜叉。

そして・・・。

血のように赤い髪をなびかせた赤き夜叉。

赤の眼と青の眼と紫の眼。

銀の髪と銀の髪と赤の髪。

戦争が終わった時。

一人は言葉もなく戦場を去り・・・。

一人は大事な者を護ると言い・・・。

一人はもう何も失わないと誓った。

今はこの世に存在しない部隊『日華』。

残った者達は何を思い生きているのか・・・。

第零訓　日華という名の部隊（後書き）

どうでしたか？

感想お願いします。

第一訓　銀髪の青年と赤髪の青年（前書き）

この話でオリキャラ二人出しまーす。

第一訓　銀髪の青年と赤髪の青年

「銀さん。せっかく買い物に来たんですから他のとこ行きましょうよ。」

新八が土手に寝転がっている銀時に言った。

「ヤダ。銀さん疲れた。行くなら二人でいってこーい。」

銀時はあくびをしている。

「ほら、お金持たしてやっからよ。」

銀時は新八の手にお金を握らせた。

「じゃあ、行ってきますからね。」

「迷子になるからどこにもいっちゃいけないアルヨ。」

「へーい。」

銀時は短い返事をして、二人を送った。

「銀ちゃんも来て欲しかったアル。」

銀時と別れてから神楽が言った。

「仕方ないよ、あの人はそういう人だから。」

新八も呟いて、二人は歩いて行った。

だいぶ歩いたところで新八は誰かとぶつかった。

「うおっ。」

そして、新八は手に握ったお金を落としてしまった。

そのお金を拾ったのは・・・・。

「アンちゃん、見てください。お金っすよ。攘夷の資金に少しぐらいはなるんじゃないですか？」

いかにもチンピラという人が言った。

「あの・・・それ僕たちのお金なんですけど・・・・。」

新八が恐る恐る言った。

「あぁ？落とした方が悪いんだよガキが。」

「いや・・・でも・・・・。」

「あぁ？やんのかくそガキ？」

チンピラは新八の襟を握った。

「新八に何するアルカ！！」

「黙ってろガキが！！」

チンピラがそう叫んだ時・・・・。

ガン！

「うおっ。」

チンピラがいきなり襟を放したと思うとそのまま倒れた。

「何アルカ・・・？」

「江戸も物騒だな。特にかぶき町はチンピラだらけじゃねぇーか・・・。」

倒れたチンピラの後ろから出てきたのは左手で十手を持て遊んでいる男が立っていた。

髪は銀時並みに綺麗な銀色で銀時並みに死んだ目で綺麗な青色な眼をした青年だ。

その横からは赤色の髪で紫の眼をした背の小さめな青年が立っていた。

「しかも、攘夷志士の名前を語ってるしねィ。」

「ホントバカじゃねぇーか。」

二人はバカにするような言い方だ。

「お前ら何しとんじゃー！！」

チンピラが二人に襲いかかるが、それを銀髪の青年があっさりと叩く。

「ククク。弱いねー。」

「ホントでさァ。良く攘夷志士の名を使ってるねィ。」

二人はニヤッとした顔だった。

「このSヤローー！！」

チンピラはどなった。

「ククク。Sじゃねぇーよ、ドSだよー。」

「お前ら覚えとけー！！」

チンピラはそう言って去って行った。

「覚えるわけねェーですぜィ。」

赤髪の青年が言った。

「で、大丈夫？怪我とかしてねぇーか？」

銀髪の青年が座り込んでいる新八に聞いた。

「だ、大丈夫です・・・。」

「よかった〜。」

銀髪の青年が笑った。

「で、お二人さんは坂田　銀時という人を知らねぇーですかィ？」

「えっ、銀さんに何か用があるんですか？」

新八が驚いている顔をしている。

「えっ知ってるの？」

銀髪の青年の方が驚いた声で言った。

「銀ちゃんは私が居候してるとこのオーナーネ。」

「へぇー。今どこに居るの？」

「えっと土手のとこに居ると思います。」

新八が言った。

「悪いけど案内してくれませんかィ？ここに来るの初めてで良く分からないんでィ。」

「いいアルヨ。」

神楽が元気に返事をして、二人の手をひっぱった。

「銀さーん。」

「うん？あ、新八に神楽。思った以上に早かったな・・・・。」

銀時はさっきまで寝ていたらしく眼を擦っている。

「いや、銀さんに会いたい人が居て・・・・。」

「あ？」

銀時が間抜けな声を出す。

「銀髪の男の子と赤髪の男の子アル。」

「銀髪と赤髪？」

銀時が聞いた。

「はぁ～。兄貴は相変わらずダラーってしてるねぇー・・・・。」

「銀らしいってことでさァ。」

二人が呆れた風に言った。

銀時が体をぱっと体を起こす。

「お前ら・・・・龍銀に義希・・・・か？」

「イエス。」

「そうでさァ。」

二人は笑顔で言った。

「１０年ぶりか・・・。龍銀は全然変わってねぇーな、義希は髪切ったのか。」

「兄貴は相変わらずの天パだね。」

「銀さんの知り合いなんですか？」

新八が聞いた。

「あぁ。知り合いっーか・・・。その銀髪が坂田（さかた）　龍銀（りゅうぎ）で俺の弟だ。」

「えー！！銀ちゃん弟が居たアルカ？」

神楽が驚きの声を上げる。

「そう、似てるだろ？で、この赤髪が俺の義理の弟みてーな感じかな？源（みなもと）　義希（よしき）っーんだ。」

「義理の弟ですか・・・？」

「おぉ。昔は髪が長かったんだぞ。」

銀時が懐かしいという感じに言った。

「切っても似合ってるだろ？」

義希が笑顔で言った。

「まぁーな。」

「で、兄貴。俺ら行くとこがないからさ、居候させて！！」

龍銀が頼んだ。

「仕方ねぇーな。ただ、居候するからには仕事も手伝えよ。」

「仕事なんて全然ないですけどね・・・。」

新八が呟いた。

「俺らはそんなこと気にしないぜィ。」

「じゃあ。兄貴、これからよろしくな～。」

龍銀も義希も明るく言った。

「お願いします。僕、志村新八です。」

「私は神楽ネ。夜兎アルヨ。」

こいつらはこんな明るく言ってるが・・・。

俺に恨みとかがないのか？

攘夷戦争中にお前らに何も言わずに戦場を去った俺に・・・。

お前らを見捨てた形になった俺に・・・。

第一訓　銀髪の青年と赤髪の青年（後書き）

どうでしたか？

感想お願いします。

第二訓　関係（前書き）

真選組が登場。

あっ、ゴリラは出してない。

第二訓　関係

「この建物の上が俺の住まいの万事屋銀ちゃんだ。で、下がくそババァのスナックだ。」

銀時が建物の前で言った。

「へぇー。なんでも屋ってこと？」

「ま、そんなんだ。」

義希は楽しそうな顔で見ている。

「銀ちゃん、もう中に入ろうヨ。」

神楽が銀時の袖をひっぱって言った。

「あぁ、そうだな。」

銀時は短く返事をして、中に入った。

その後ろを新八たちが追う。

「これが中だ。オメーらの部屋は・・・ま、好きなところを使って。」

「分かった。」

龍銀はあちらこちらを見てまわっている。

「ここがいい。普通に居間のソファーの上で寝るよ。」

「俺もそこにするぜィ。」

龍銀も義希も明るく言った。

と、そこへ・・・。

「邪魔するぞ。」

「あっヅラ。」

「ヅラじゃない、桂だ。」

桂の名言が返ってきた。

「久しぶり、ヅラ。」

「１０年ぶりだよねィ、ヅラ。」

「ヅラ、ヅラ、うるさーい！！お前ら俺に恨みでもあるのか。」

桂が怒鳴った。

「とういうか貴様ら・・・龍銀と義希か？」

「そう！！」

「そうでさァ。」

二人は笑顔で言った。

「つーか、ヅラ。お前また真選組に追われてんのか？」

「そう。だからかくまってくれ。」

「いや～、指名手配犯は大変だねィ。」

「ホントー！！」

二人はニヤッと笑っている。

「お前らは呑気でいいよ。名前が外にばれてないぶん・・・。」

桂が呟いた。

と、そこへ・・・。

ありえない連中が・・・。

ピンポーン。

「へーい。」

銀時は桂と神楽、新八を奥の部屋に押し込んでから返事をした。

「て、お前らかよ。」

銀時がめんどくさそうな顔をする。

そこに立っているのは真選組の沖田と土方だ。

「どういうことですかィ？」

「ああ？」

「いや、だからなんで旦那のとこに桂が入って行ったんですかィ？」

（あ・・・。見られてた・・・。）

「いや、なんのこと？」

銀時は知らないという顔をしている。

「ごまかしても無駄だぜ。大体お前と桂は池田屋事件で関わっていることは分かってんだ。」

土方が鋭いとこを突く。

「えっと・・・、それは・・・。」

銀時が口ごもる。

（俺、そういうの苦手なのに・・・。）

「関係ねェーですぜィ。」

「は？」

土方が間の抜けた声を出す。
「そうだよ。兄貴はそんなんにかかわってねぇーって。つーか桂って誰？カツラのこと？」
龍銀が言った。
「お前ら誰だ？」
「あぁ。俺、銀時の弟の坂田　龍銀。」
「俺ァは源　義希。」
「弟ぉぉぉ！！」
土方と沖田が驚いた声を出す。
「そうだよ。幕府のワンちゃん。」
龍銀がニヤッと笑う。
土方が眉間にしわを寄せる。
「バカ。挑発してどうすんの？」
「いや、別にいいっしょ。」
龍銀が笑顔で言った。
「よくないに決まってるだろィ。」

「別にいいだろ。」

「よくない！」

「いい。」

「よくないって！！」

二人は口げんかを始まる。

「お前ら、喧嘩すんな～！！」

銀時が仲介をする。

「たくっ。いつまでたってもガキだな、お前らは・・・。」

銀時は呆れ気味だ。

二人は頬を膨らませた。

（つーか、ここも早く終わらせねぇーとヅラのやつがキレ出す・・・。）

「で、オメーらの用は済んだか？」

「済んでねぇー。」

「ならさっさと済ましてくれ。」

銀時はめんどくさそうだ。
「だから、本当に桂とは関係がねぇーのか？」
「ないよな、兄貴。」
龍銀が銀時の眼をしっかり見る。
銀時が龍銀に囁く。
「あのよ・・・。俺、嘘つきたくねぇーんだよ・・・。」
「ならつかなきゃいいじゃん。」
「でも、この雰囲気ヤバいじゃん。」
「ヤバくしたのは兄貴だろ。」
二人はごにょごにょ話している。
「じゃあ、真選組でその証拠を探したらいいじゃないですかィ？」
二人が顔を上げる。
「そうすればいいと俺ァは思いますがねィ。」
少しの間沈黙がうまれた。
「分かった。じゃ、万事屋。俺らがお前のことを調べつくしてやる。」

土方はそう告げ、去って行った。

二人が帰ってから銀時が口を開いた。

「おい、義希。いいのか？そんなことして・・・。」

「いいでさァ。大体、調べたとこで出てくる可能性はほとんどねーだろィ？」

「まぁ、そうだけど・・・。」

そこへ、桂たちが奥の部屋から出てきた。

「ヅラ・・・。お前、逃げの小太郎だろ？もっとうまく逃げれねぇーのか？」

銀時が呆れた顔をしている。

「真選組の密偵に腕のいい奴が居るのだ。」

「言い訳は聞かねぇーぞ。」

その後、桂は軽く笑った。

「あ？」

「いや、お前らを見ていると『日華』を思い出すなと思ってな。」

「「「！！」」」

「おい、ヅラ。いきなりなんだよ？驚いちまっただろ。」

「そうでィ。」

二人は驚いた様子だった。

「桂さん。『日華』ってなんですか？」

新八が不思議そうな顔をしている。

「おい、銀時。言ってもいいか？」

「別にいいんじゃね？神楽も新八も俺が白夜叉だったことは分かってるしよ。」

銀時がぶっきらぼうに言った。

「なら言うぞ。『日華』というのは銀時が攘夷戦争時代に率いた部隊のことでな、その幹部に龍銀や義希が居たんだ。」

「銀さん、部隊なんか率いていたんですね・・・。」

「昔の事だ・・・。」

そう言う銀時の眼はいつもの眼より真面目だった。

「とにかく、ヅラ。オメーさ、早く帰ってくんねぇーか？」

「すまない。では失礼した。」

桂はそう言うと万事屋を後にした。

「日華なんて名前、何年ぶりに聞いたかなぁ～。」

桂が帰った後、龍銀が懐かしそうな眼をしていた。

そして、付け足すように言う。

「幕府の狗はどこまでの情報を仕入れんのかな？ククク、楽しみだ。」

「龍銀。真選組で遊ぼうなんて考えんなよ。」

「龍はそういうとこあるからねィ。」

「あぁ？俺の楽しみ奪ったら、痛っ。」

龍銀の声をゲンコツが遮った。

「だから遊ぶな言ってんだろ？」

「わーったよ。」

（でも、本当に楽しみだ・・・。）

龍銀は左手で十手を一回、まわした。

第二訓　関係（後書き）

どうでしたか？

自分は何がしたいんだろう・・・。

ここで、龍銀と義希の紹介、乗せておきます。

坂田　龍銀

・銀時の弟で２４歳　・誕生日は7月１０日
・髪の色は銀色で、眼の色は青（眼は死んでいる）
・髪は桂と同じく長い（ストレート）
・服装は黒の着物に緑の上。
・性格は高杉と銀時の間

源　義希

・１９歳　・誕生日は5月２５日
・髪は赤色で眼は紫
・髪は前髪の横の部分だけ少し長く、後は短い
・服装は赤の上に紺の袴。それに、白い上着に、青のスカーフ
・性格は明るく、元気で、子供っぽい

感想お願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4429ba/

日華　二人の白夜叉と赤夜叉

2012年1月12日23時49分発行